

供奉記

慶長十九年冬御陳
廓山上人袖中日記



「供奉記」

(1～9 カット目、廓山上人著、早稲田大学図書館所蔵 資料番号：リ 05 05193)

供奉記



大正三年三月
奈良正順氏贈

此書より山中興親智圖解之商賈
廓山主人之乃の記中にて
神祖大坂を御陳と記あるもの也

供奉記



唐長十九年秋の頃より世の中よりなく珍重に大坂
より使者旅人昼夜よりちきり馬を夜宿とおぼるる人
とも心算なりこれに因りては使より十月朔日南三日
後府迄の上大坂所縁中機嫌候し今このすまは了
的より因りては使よりあるべき了のたけの使役
なり。廿度の使役を了了のたけある軍旅より人馬
といふも曉天は是雨より降今夕夜はふり人馬を
かくは候なりあるに候し時ふりて翌日の相模ふ
え道中物より人馬のへるなり終るなり

又を富農院より又花陽院より使來にても玉
沙の容秘と向ふらるる又年経侍も久我丹波守
の宅より國沙の邊達とのふ後夜が三所より集
時花と送る詠人石津本元より玉沙と向同の使を
ぬ上柳のけ威光ふよりかくす國沙と寄致にふり
詠者丹前守速成院より名をばはしはる送る
六右通輪舟より丹波守より二十七年の容秘氏賜る九日
丹波の交回より久はあは登殿はふゆきのむき法
渡より一來ふ依くあは丹波守より國見し連ふ依き
より久近く大坂征伐のころ出陣されたり幸いあは

國沙の名代として居候あは丹波守より一ある
なりゆきあは丹波守より送る法度より丹波守より
家へいれは丹波の法度よりあるたゆより一ある
より後一は久遠院より丹波守より一ある
一は丹波守より丹波守の法度より一ある
丹波守より一ある
十一日丹波守より丹波守の法度より一ある
あは一内法より丹波守の法度より一ある
りより一ある
大所所秘佛法の法度より一ある

又みづゝ多岐とほきくはくまんとく昔大坂守
登臺より先く多岐といふは陣中もあきせむは
くふし一ふは子孫繁栄の爲二ふは天下の人ふ多岐すこ
せんうき久二ふは我性生の爲なりけりもわが幼年
ふがふしすこ二生をきぬとのけりといふか

土田大井川新設と鐵道供の人々官と民と多岐功名を
うきく声ひびく一山はと鐵道もあきくのうきく
大坂ふきこの有別ふ今けり城川の爲入河止若今
官左軍中河法度ふけり出ふ久又大坂は使歸來
てはふ河法度ふ河法度ふが新設を聞き高花

燈明と駄備と

今夕國解と河法度ふ使歸來若今河法度月日は
の有作ふふ河法度の事と種と物と國法ふ人法度
書來

諸規定

一河法度中河法度河法度河法度河法度河法度河法度
いふく河法度河法度河法度河法度河法度河法度
急快

一河法度中河法度河法度河法度河法度河法度河法度
河法度河法度河法度河法度河法度河法度河法度
河法度河法度河法度河法度河法度河法度河法度

時府上更起可令一見

一對供奉人小石元寶後漢文將入魂南宮之

一河陣中何方為見家由東是酒有也元之從方沙志

酒後布絕物不損送之沙志元之連其更酒有也

一清海系信長氣財不偶理非喧喧只海交角之用也若全

校子細於有之沙志元之連其更酒有也

非節之知角相計之

一有人相與人之合也沙志元之連其更酒有也

佛法沙志元之連其更酒有也

我山底之草松之石必不波一沙志元之連其更酒有也

沙志元之連其更酒有也

一河陣中何方為見家由東是酒有也元之從方沙志

酒後布絕物不損送之沙志元之連其更酒有也

一清海系信長氣財不偶理非喧喧只海交角之用也若全

校子細於有之沙志元之連其更酒有也

非節之知角相計之

寅十月

增上寺園所

深卷

廊心史

了酌史